乳幼児の母親がもつ家庭外育児サポートに関する研究

―私的サポートの機能と育児不安・ストレスとの関係を中心に―

森下　剛

一、本研究の目的

本研究の目的は、乳幼児を持つ母親の家庭外の私的な育児サポート資源の機能を明らかにするとともに、その機能が、母親の属性、育児不安・ストレスとどのように関係するかを明らかにすることである。

現代の日本において、育児は大きな転換期にあると言える。行政においても、様々な育児支援を目的とした施策がなされている。例えば、文部省・厚生省・労働省・建設省は、一九九四年に四省合同で「今後の子育て支援のための施策の基本的方向について（エンゼルプラン）」を発表している。この内容は、養育者の負担を軽減し、子育て支援社会の構築を目指すことを示している。この内容からも、現代社会において育児に関連する養育者の経済的負担や心理的負担が大きいことが社会的に認知されるようになったと考えられる。育児が家庭・養育者の責任としてのみ行われるのではなく、社会全体が育児に責任を持つ方向へと社会的認識が転換しつつあると言える。

しかし、実際に養育者、特に母親が抱える育児負担は、今もなお深刻な問題として捉えられる。「エンゼルプラン」においても、少子化の背景となる要因として、「育児の心理的、肉体的負担に耐えられないという理由がかなり存在している」ことを指摘している。特に母親がもつ育児不安・ストレスは深刻な問題の一つである。経済庁国民生活局の「平成九年度国民生活選好度調査」（一九九七）における、第一子が小学校入学前の母親を対象とし

た調査では、専業主婦の七〇・〇%が「育児の自信がなくなる」、七五・〇%が「自分のやりたいことができなくなる」、七八・七%が「なんとなくイライラする」の項目に対して「よくある」または「時々ある」と回答している。母親の育児不安・育児ストレスの長期化は母親自身の精神衛生を悪化させる（佐藤ら、一九九四）だけでなく、子どもへの悪影響やさらには幼児虐待等に繋がることが考えられる。母親の育児不安・育児ストレスを低減することは、保育・教育に関係する者に課せられた大きな課題の一つである。

母親の育児不安・ストレスを低減する要因として、先行研究では個人的要因と社会的要因の二つが主として取り上げられている。田中・尾添（一九九六）は、個人的要因として「楽観性―悲観性の次元」、「セルフエフィカシー」、「母親になる以前の乳幼児・児童との接触経験及び育児経験」の三つを挙げ、社会的要因として「ソーシャルサポート」を挙げている。育児に関連する具体的なソーシャルサポートの供給源として、菅原（一九九九）は、父親（夫）・祖父母・家庭外のサポートネットワークの三つを挙げている。諏訪・戸田・堀内（一九九八）によると、一歳児を持つ有職女性の子育てサポートの供給源として上位五つは、順に、「夫」、「実家の父母」、「保育園・幼稚園・学校の先生」、「かかりつけの医者」、「近所の人や友人」となっている。厚生省もまた「平成十年版厚生白書」（一九九九）において、「母親の育児不安を解消するには、父親はもちろんのことできる限り多くの人が子育てにかかわる中で、母親自身も過度の子どもとの密着関係を見直すことが必要である。また、児童相談所を始めとする相談機関による積極的な子育て支援や親同士の子育て支援ネットワーク作りなども求められる」（八四頁）と述べている。すなわち、育児不安・ストレスを低減する要因として、個人的要因以外に、社会的要因に着目する必要がある。

育児不安・ストレスを低減する社会的要因、すなわちソーシャルサポートの研究とその応用は、現在まさに急務の課題である。そのソーシャルサポートについても、父親や祖父母といった血縁者、家庭内のサポートのほかに、家庭外のサポートに焦点を当てる必要がある。「厚生白書」で提言されている「相談機関による積極的な子育て支援や親同士の子育て支援ネットワーク作り」は、家族外サポートの一つの形態である。これらが具現化し、有効性をもつためには、家庭外の育児サポートが備える

内容とその機能に焦点を当てた基礎的な研究が不可欠である。

では、家庭外のサポートが提供する内容にはどのようなものがあるだろうか。佐藤（一九九六）は、育児支援システムでの事業として、①子どもの成長・発達についての知識などをもとに、育児のいとなみについての見通しとノウ・ハウを伝える「講座」などの方法によるもの、②育児者の日常の育児の悩みに分け入って、具体的な事がらの相談にあたる相談事業、③子どもの遊びグループづくり、母親の育児グループづくりの活動、の三つを挙げている。また、亀山（一九九八）の調査によると、母親が希望する育児支援としてベビーシッターや託児施設が挙げられている。加藤・津田（一九九八）の〇歳児の乳児をもつ母親の調査では、急なときに赤ちゃんを預かってくれる人がいるかどうかが育児ストレスに大きく影響している。これらの先行研究をもとに育児サポートの内容を整理すれば、①育児知識の提供、②育児相談、③育児グループづくり、④託児の四つが中核を占めるものとして考えられる。

これらの家庭外の育児サポートは、公的に意図的に設けられるもの以外に私的に存在するものがある。特に、育児グループと託児は、母親の私生活の中で程度の差はあるものの自然に作られているものである。これらの母親の私的なサポートのもつ機能を分析することは、今後の公的な育児支援事業を進める上で、重要な意味を持つ。それは、①私的な育児サポートが有するポジティブな機能を公的なサポートにおいても有するための情報を提供する、③私的な育児サポートが有するネガティブな機能を公的なサポートにおいて低減させるための情報を提供する、と考えられるからである。

これらの課題から本研究においては、乳幼児の母親が持つ私的なサポートの機能を分析し、育児不安・ストレスとの関係を明らかにする。私的な育児サポートの内容として、「子どもと一緒に家族以外の者と過ごす場面」（育児グループ）と「家族以外の者に子どもを預ける場面」（託児）を取り上げ、その二つについてそれぞれがもつ、ポジティブ、ネガティブな機能について探索的な調査・分析を行う。その結果から、育児に関する公的なサポートを企図する際に考慮されなくてはならない点について考察する。

二、方法

（一）調査対象

調査対象は、A県B市内に住む一歳から幼稚園・保育園入園前（三―四歳）の乳幼児を持つ母親である。有効回答数は三十二名であった。

（二）調査内容

調査は質問紙調査であり、その内容は、フェイスシート、サポートの機能に関する項目、育児不安・ストレスに関する項目からなる。

サポートの機能に関する項目は、本研究に先だって行った予備調査の結果をもとに筆者が作成した。サポートの場面として、「子どもとともに他者と過ごす場面」である「公園」と、「子どもを他人に預ける場面」として、「知り合いに子どもを預ける」場面を取り上げた。それぞれについて、利用頻度とともに、それぞれの機能に関する項目に対する回答を得た。項目は、公園場面五十一項目、子どもを他人に預ける場面三十四項目からなり、「よく当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」の四件法で回答を求めた。

育児不安・ストレスに関する項目は、川井・庄司・千賀・加藤・中野・恒次（一九九三）によって開発された「育児不安尺度」を援用した。この尺度は十五項目からなり、尺度は「不安・抑うつ感」七項目、「育児困難感」八項目からなる。項目は、「よく当てはまる」、「やや当てはまる」、「あまり当てはまらない」、「全く当てはまらない」の四件法で回答を求めた。

（三）調査手続き

質問紙は、筆者から直接各母親に配布され、無記名で回答を求めた。一週間から二週間後に封書にて筆者に直接返送された。

（四）調査時期

調査時期は、二〇〇〇年十一月であった。

三、結果と考察

（一）項目の検討

一）公園場面に関する項目

①利用頻度

公園に行く頻度の項目に対する回答は、Figure 1に示す通りである。後の分析のために、「週に四回以上」と回

答した者を「高頻度群」、「週に一回」または「二週間に一回」と回答した者を「低頻度群」とした。

②機能に関する項目の検討

公園に行くことの機能に関する項目について検討を行った。構成概念上設定した八側面の五十一項目について、度数に偏りのある項目、相関係数.70以上の項目を削除した。その結果、十四項目が削除され、八側面三十七項目が後の分析に用いられた。分析に用いられた全項目は、Table 1に示す通りである。

二）子どもを他人に預ける場面に関する項目

①利用頻度

子どもを他人に預ける頻度の項目に対する回答は、Figure 2に示す通りである。後の分析のために、「週に一回」、「二週間に一回」、「月に一回」と回答した者を「高頻度群」、「ほとんどない」と回答した者を「低頻度群」とした。

②機能に関する項目の検討

子どもを他人に預けることの機能に関する項目について検討を行った。構成概念上設定した五側面の三十四項目について、度数に偏りのある項目、相関係数.70以上の項目を削除した。その結果、十四項目が削除され、五側面二十項目が後の分析に用いられた。分析に用いられた全項目は、Table 2に示す通りである。

三）育児不安の項目

川井ら（一九九三）によって開発された「育児不安尺度」の項目について検討を行った。「不安・抑うつ感」七項目について、度数に偏りのある項目、相関係数.70以上の項目を削除した。その結果三項目が削除され、四項目が後の分析に用いられた。「育児困難感」八項目について、度数に偏りのある項目、相関係数.70以上の項目を削除した。その結果二項目が削除され、六項目が後の分析に用いられた。分析に用いられた全項目は、Table 3に示す通りである。

「不安・抑うつ感」の項目の得点を合計し、合計得点による群化を行った。合計得点が四―八点の者を「低不安群」（n = 10）、十―十五点の者を「高不安群」（n = 12）とした。

「育児困難感」の項目の得点を合計し、合計得点による群化を行った。合計得点が六―十三点の者を「低困難群」（n = 14）、十五―二十一点の者を「高困難群」（n = 13）とした。

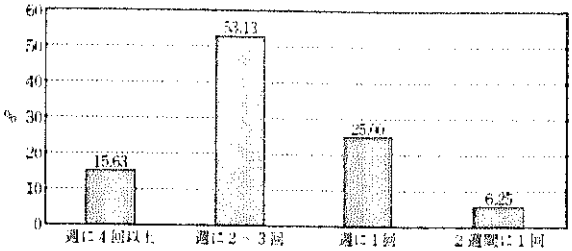

Figure 1　公園に行く頻度

Table 1　公園の機能に関する項目

ポジティブな側面	ネガティブな側面
(1)　情報獲得の側面 ・育児に参考になる情報を得る ・幼稚園や保育園について情報を得る ・育児以外の生活の情報を得る ・子どもを連れて行く場所の情報を得る ・子どもの遊びに関する情報を得る (2)　相談の側面 ・他の母親に子育ての悩みを相談する ・他の母親から子育てについてアドバイスを受ける ・子育てについて他の母親と話し合う ・他の母親と子どもの成長について話し合う (3)　子ども、子育ての客観視の側面 ・自分の子どもを客観的に見る ・他の子どもと自分の子どもを比較する ・子どもの新しい面を発見する ・自分の子どもの他の人への関わり方を見る ・自分の子以外の他の子どもを観察する ・自分の子以外の他の子どもと関わる (4)　精神的安定の側面 ・子どもを見て朗らかな気持ちになる ・気が楽になる ・解放された気分になる ・子どもに関わることが少なくなる ・子どもへの対応が家にいるより楽になる (5)　交流の側面 ・同年齢の子どもを持つ母親と交流する ・子育ての仲間集団に入る	(6)　対人関係の側面 ・他の母親に気を遣う ・他の母親との付き合い方が難しい ・母親の仲間関係で気を遣う ・他の母親との付き合いがわずらわしい ・母親の仲間関係が息苦しい (7)　多忙感の側面 ・出かけ際、自分の準備が大変である ・出かけ際、子どもの準備が大変である ・家事をする時間が少なくなる ・なんとなくあわただしい ・自分達親子のペースで行動できない ・時間的に拘束される (8)　子どもの対応に関連する側面 ・子どもを叱る回数が増える ・子どもへの対応に疲れる ・子どもへの対応が家にいるときよりも大変 ・子どものもめごとへの対応が難しい

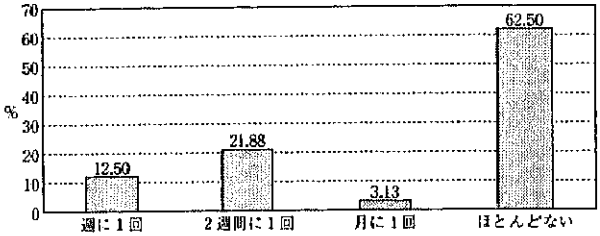

Figure 2　子どもを他人に預けることの機能に関する項目

Table 2　子どもを他人に預けることの機能に関する項目

ポジティブな側面	ネガティブな側面
(1)　精神的安定の側面 ・子育てから解放される ・自分が母親であることから離れる ・自分の好きなことに集中できる (3)　子育てへの好影響の側面 ・再会時に子どもが大切であると感じる ・子どもに再会したとき新鮮な気持ちになる ・子どもに会いたい気持ちになる ・自分の子育てをゆっくりと振り返る	(4)　気遣いの側面 ・子どもを預ける人へ気を遣う ・子どもを預ける人に対して心苦しい ・預ける人が大変だろうなと思う ・子どもがわがままをして困らせないか気になる (5)　子どもへの不安の側面 ・子どもが怪我をしないか気になる ・なんとなく不安である ・離れている間子どものことが頭から離れない ・子どもが寂しがっていないか気になる (6)　子どもへの罪悪感の側面 ・自分の勝手を子どもに押し付けている気がする ・自分だけ楽しんでいるように感じる ・子どもとの離れ際うしろめたい ・子どもが放っておかれたと感じるのではないかと思う ・別れ際、後ろ髪を引かれるような気持ちになる

Table 3　「育児不安尺度」(川井，1993) から用いられた項目

不安・抑うつ感	育児困難感
・何事にも敏感に感じ過ぎてしまう方である ・楽天的であまりくよくよと考えない方である（逆転）はないかと思うことがある ・気が滅入ることがよくある ・何とも言えず寂しい気持ちにおそわれることがよくある	・母親として不適格と感じる ・叱りすぎるなど、子どもを虐待しているので ・イライラすることが多い ・とても幸せな気分で過ごしている（逆転） ・何となく育児に自信がもてないように思う ・子どもを育てることが負担に感じられる

(二) 公園場面の機能と各要因の関連

一) 利用頻度と公園場面の機能の関連

公園に行く頻度と公園場面の機能の関連を明らかにするため、独立した母集団の t 検定を行なった。Table 4は有意差のあった項目を示したものである。「他の母親から子育てについてアドバイスを受ける」と「家事をする時間が少なくなる」の項目に有意な差が見られた ($t(13) = 2.40, p < .05$; $t(13) = 2.40, p < .05$)。

公園に行く頻度の高い母親は、頻度の低い母親に比較して、他の母親から子育てのアドバイスを多く受ける一方で、家事をする時間が少なくなると感じていることが示された。これは、高頻度の母親が、家事の時間が少なくなることを感じてでも、公園に行く意義を感じていることを示している。その機能には、子どもを他者と遊ばせるだけでなく、他の母親から子育てのアドバイスを受けることが示された。この子育てに関するアドバイスは、母親を公園に向かわせる強い要因として捉えられ、私的な育児相談というサポートの一部をなしていると捉えられる。

二) 年長のきょうだいの有無と公園場面の機能の関連

幼稚園・保育園以上の教育機関に在籍している年長のきょうだいの有無と公園場面の機能の関連を明らかにするために、独立した母集団の t 検定を行なった。Table 5は有意差のあった項目を示したものである。「育児に参考になる情報を得る」($t(29) = -2.96, p < .05$)、「子どもを連れて行く場所の情報を得る」($t(30) = -2.48, p < .05$)、「同年齢の子どもを持つ母親と交流する」($t(30) = -2.76, p < .05$)、「子育ての仲間集団に入る」($t(30) = -2.48, p < .05$)、「他の母親に気を遣う」($t(30) = -2.22, p < .05$)、「子どものもめごとへの対応が難しい」($t(29) = -2.34, p < .05$)、の項目に有意差が見られた。

幼稚園・保育園以上のきょうだいをもたない母親は、年長のきょうだいをもつ母親と比較して、育児の情報、子どもを連れて行く場所の情報を得ていること、他の母親との交流、子育ての仲間集団に入ることを意識していることが明らかになった。その一方で、他の母親に気を遣う、子どものもめごとへの対応が難しいと感じていることが示された。

この結果は、育児経験の短い母親にとって、公園で得る育児に関する情報の重要性を示している。さらにこの

結果は、育児経験の少ない母親が、育児に関する情報について敏感になっていると捉えることもできる。さらに、年長のきょうだいをもたない母親は、他の母親との交流、育児の仲間集団に入ることを強く意識していることが明らかになった。この結果は、母親になって短い期間の者が、同じ立場の他者とのつながりを求めていることを示すと考えられる。その一方で、母親という立場での交流期間の短さから、他の母親に気を遣うという結果も示された。これらの結果は、母親になって期間の短い者が、試行錯誤しながら、公園という場所で他の母親との交流、仲間関係を築いていくことを示すと捉えられる。

年長のきょうだいをもたない母親が、子どものもめごとへの対応が難しいと感じている結果は、以下のように考察される。今回の調査では、年長のきょうだいをもたない被験者のほとんどが、子どもを一人しか持っていなかった。一人っ子の家庭では、子ども同士の関わりが少なく、母親自身も子どもどうしの関わりについて介入する機会が少ない。それゆえ、子ども同士のもめごとについて、その対応が難しいと感じていると考えられる。

三）育児不安と公園場面の機能の分析

①「不安・抑うつ感」との関連

「不安・抑うつ感」と公園場面の機能の関連を明らかにするため、独立した母集団の t 検定を行なった。Table 6 は有意差のあった項目を示したものである。「育児以外の生活の情報を得る」($t(20)=3.52, p<.01$)、「子どもの遊びに関する情報を得る」($t(20)=2.54, p<.05$)、「他の母親との付き合い方が難しい」($t(20)=-3.39, p<.01$)、「母親の仲間関係が息苦しい」($t(20)=-2.96, p<.01$)、「なんとなくあわただしい」($t(20)=-3.92, p<.01$)、「自分達親子のペースで行動できない」($t(20)=-2.11, p<.05$)、「時間的に拘束される」($t(20)=-3.13, p<.01$)、「子どもを叱る回数が増える」($t(20)=-2.19, p<.05$) の項目に有意差が見られた。

「不安・抑うつ感」の低い母親は、「不安・抑うつ感」の高い母親と比較して、育児以外の生活情報、子どもの遊びに関する情報を得ていることが示された。一方で、「不安・抑うつ感」の高い母親は、「不安・抑うつ感」の低い母親と比較して、他の母親との付き合い方、仲間関係に難しさを感じていることが示された。また、「不安・抑うつ感」の高い母親は、多忙感を感じるとともに子ど

もを叱る回数が増えると感じていることが示された。ここで「不安・抑うつ感」の低い母親が得ている情報が、育児そのものに関するものではないことは重要である。「不安・抑うつ感」の低い母親は、その仲間関係の中で、育児にとらわれずそれ以外の情報を得られると感じている。これは、心理的な余裕を現した結果として捉えることができる。その一方で、「不安・抑うつ感」の高い母親は、母親同士の仲間関係の難しさを感じている。これは、育児に限らず、本人の仲間関係においても、母親の不安感が現れた結果として捉えられる。さらにそれは、「自分達のペースで行動できない」、「時間的に拘束される」などの多忙感につながると捉えられる。また、母親の「不安・抑うつ感」が高いゆえに、公園という子どもにとっての社会的場面においても、気を遣う場面や不安になる場面が多くなると考えられる。それゆえ、子どもを叱る回数が増えることにつながると考えられる。

②「育児困難感」との関連

「育児困難感」と公園場面の機能の関連を明らかにするため、独立した母集団のt検定を行なった。その結果、有意差のある項目は見られなかった。

(三) 子どもを他人に預ける場面の機能と各要因の関連

一) 子どもを他人に預ける頻度とその場面の機能との関連

子どもを預ける頻度とその場面の機能の関連を明らかにするため、独立した母集団のt検定を行なった。Table 7は有意差のあった項目を示したものである。「子どもを預ける人に気を遣う」($t(26)=4.28, p<.001$)、「子どもを預ける人に対して心苦しい」($t(26)=3.35, p<.01$)、「なんとなく不安である」($t(25)=-2.11, p<.05$)、「離れている間子どものことが頭から離れない」($t(26)=-3.91, p<.01$)、「子どもが寂しがっていないか気になる」($t(26)=-2.36, p<.05$)、「子どもとの離れ際うしろめたい」($t(26)=-2.12, p<.05$)、「別れ際、後ろ髪を引かれるような気持ちになる」($t(26)=-2.92, p<.01$) の項目に有意差が見られた。

子どもを他人に預ける頻度の低い母親は、頻度の高い母親と比較して、預ける人に対する気遣いや心苦しさを強く感じていることが示された。また、子どもと離れている間に、不安感を強く感じていることが示された。さらに、子どもと離れる際に、後ろめたさや離れることへの不安を感じていることが示された。

Table 4　公園に行く頻度による機能の t 検定結果

	高頻度群	低頻度群	t 値
他の母親から子育てについてアドバイスを受ける	3.40 (0.55)	2.20 (1.03)	2.40*
家事をする時間が少なくなる	3.20 (0.45)	2.40 (0.70)	2.31*

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 5　幼稚園・保育園以上のきょうだいの有無による公園場面の機能の t 検定結果

	年長あり	年長なし	t 値
育児に参考になる情報を得る	2.91 (0.54)	3.50 (0.61)	−2.86*
子どもを連れて行く場所の情報を得る	2.67 (0.65)	3.25 (0.64)	−2.48*
同年齢の子どもを持つ母親と交流する	3.0 (0.60)	3.55 (0.51)	−2.76*
子育ての仲間集団に入る	2.08 (0.79)	2.85 (0.86)	−2.48*
他の母親に気を遣う	2.42 (0.67)	2.90 (0.55)	−2.22*
子どものもめごとへの対応が難しい	1.75 (0.45)	2.32 (0.89)	−2.34*

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 6　「不安・抑うつ感」の差による公園場面の機能の t 検定結果

	低不安群	高不安群	t 値
育児以外の生活の情報を得る	3.50 (0.53)	2.58 (0.67)	3.52**
子どもの遊びに関する情報を得る	3.40 (0.52)	2.67 (0.78)	2.54*
他の母親との付き合い方が難しい	1.50 (0.53)	2.50 (0.80)	−3.39**
母親の仲間関係が息苦しい	1.30 (0.48)	2.00 (0.60)	−2.96**
なんとなくあわただしい	1.40 (0.70)	2.42 (0.51)	−3.92**
自分達親子のペースで行動できない	1.60 (0.52)	2.33 (0.98)	−2.11*
時間的に拘束される	1.70 (0.67)	2.50 (0.52)	−3.13**
子どもを叱る回数が増える	1.60 (0.52)	2.08 (0.51)	−2.19*

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 7　子どもを他人に預ける頻度による託児場面の機能の t 検定結果

	高頻度群	低不安群	t 値
子どもを預ける人に気を遣う	2.83 (0.58)	3.69 (0.44)	−4.28**
子どもを預ける人に対して心苦しい	2.17 (1.03)	3.25 (0.68)	−3.35**
なんとなく不安である	2.08 (0.67)	2.73 (0.88)	−2.11*
離れている間子どものことが頭から離れない	1.58 (0.67)	2.63 (0.72)	−3.91**
子どもが寂しがっていないか気になる	2.25 (0.97)	3.06 (0.85)	−2.36**
子どもとの離れ際うしろめたい	2.00 (0.60)	2.63 (0.89)	−2.22*
別れ際、後ろ髪を引かれるような気持ちになる	1.75 (0.87)	2.63 (0.72)	−2.92**

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

二）年長のきょうだいの有無と子どもを他人に預ける場面の機能の関連

幼稚園・保育園以上の教育機関に在籍している年長のきょうだいの有無と公園場面の機能の関連を明らかにするために、独立した母集団の t 検定を行なった。Table 8は有意差のあった項目を示したものである。「子どもに会いたい気持ちになる」（$t(26) = -2.59, p < .05$）、「預ける人が大変だろうなと思う」（$t(26) = -2.85, p < .01$）、「別れ際、後ろ髪を引かれるような気持ちになる」（$t(26) = -2.72, p < .05$）の項目に有意差が見られた。

幼稚園・保育園以上のきょうだいをもたない母親は、年長のきょうだいをもつ母親と比較して、預ける人への気遣い、子どもと離れる際の不安感、子どもに会いたくなる気持ちが高いことが示された。これらの結果は、先の子どもを預ける頻度による差異と共通した部分があると考えられる。幼稚園・保育園のように日常的に母親が子どもと離れる機会をもたない場合、預ける人への気遣い、離れ際の不安感を感じるとともに、子どもに会いたい気持ちになると考えられる。

三）育児不安と子どもを他人に預ける場面機能の関連

①不安・抑うつ感との関連

「不安・抑うつ感」と子どもを他人に預ける場面の機能の関連を明らかにするため、独立した母集団の t 検定を行なった。その結果、有意差のある項目は見られなかった。

②育児困難感との関連

「育児困難感」と子どもを他人に預ける場面の機能の関連を明らかにするため、独立した母集団の t 検定を行なった。Table 9は有意差のあった項目を示したものである。「預ける人に気を遣う」（$t(21) = -2.49, p < .05$）、「預ける人が大変だろうなと思う」（$t(21) = -2.87, p < .01$）、「自分だけ楽しんでいるように感じる」（$t(21) = -2.75, p < .05$）、「子どもとの離れ際後ろめたい」（$t(21) = -2.86, p < .01$）の項目に有意差が見られた。

「育児困難感」の高い母親は、「育児困難感」の低い母親と比較して、預ける人への気遣い、子どもへの申し訳なさ、子どもと離れる際の不安感が高いことが示された。この結果は、母親の「育児困難感」が、預ける人に対する気遣いという形で表現されていると捉えられる。母親本人が「育児は大変である」、「育児は難しい」と感じて

Table 8　幼稚園・保育園以上のきょうだいの有無による託児場面の機能の t 検定結果

	年長あり	年長なし	t 値
子どもに会いたい気持ちになる	2.00 (0.67)	2.78 (0.81)	−2.59*
預ける人が大変だろうなと思う	2.80 (0.79)	3.50 (0.51)	−2.85**
別れ際、後ろ髪を引かれるような気持ちになる	1.70 (0.67)	2.56 (0.86)	−2.72*

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 9　「育児困難感」の差による託児場面の機能の t 検定結果

	低困難群	高困難群	t 値
預ける人に気を遣う	3.00 (0.77)	3.67 (0.49)	−2.49*
預ける人が大変だろうなと思う	2.82 (0.75)	3.58 (0.51)	−2.87**
自分だけ楽しんでいるように感じる	1.82 (0.60)	2.75 (0.97)	−2.75*
子どもとの離れ際後ろめたい	1.91 (0.70)	2.83 (0.83)	−2.86**

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

いるゆえに、子どもを預ける際にも「この子を預かるのは大変だろうな」と考えるのである。また、子どもへの申し訳なさ、離れる際の不安感は、「育児困難感」と二重拘束の関係にあると捉えられる。すなわち、育児が困難であると考える一方で、その困難から開放される際に、不安感・罪悪感を感じると考えられる。

四、総合的考察

ここでは、本調査の結果を総合的に概観し、公的な育児サポートを企図する際に考慮すべき点について述べる。

育児グループとして取り上げた公園場面の機能について、明らかになった点は以下の通りである。すなわち、①公園に行く頻度の高い母親は、頻度の低い母親に比較して、他の母親から子育てのアドバイスを多く受ける一方で、家事をする時間が少なくなると感じている、②幼稚園・保育園以上のきょうだいをもたない母親は、年長のきょうだいをもつ母親と比較して、育児の情報、子どもを連れて行く場所の情報を得ていること、他の母親との交流、子育ての仲間集団に入ることを意識している一方で、他の母親に気を遣う、子どものもめごとへの対応

が難しいと感じている、③「不安・抑うつ感」の低い母親は、育児以外の生活情報、子どもの遊びに関する情報を得ている一方で、「不安・抑うつ感」の高い母親は、他の母親との付き合い方、仲間関係に難しさ、多忙感を感じるとともに子どもを叱る回数が増えると感じている、の三点である。

これらの結果から、公的な育児グループが企図される際に考慮されなくてはならない点は次のように考えられる。第一は育児グループにおける、母親の仲間関係についてである。育児グループの目的の一つとして、同年齢の子どもをもつ母親の仲間集団を作ることが挙げられる。本研究の結果から、特に第一子が幼稚園・保育園に入園する前の段階において、この仲間集団の形成が重要であるという結果が導き出された。公的な育児グループにおいても、第一子が入園前の母親に対してこの点を考慮することが特に重要と考えられる。しかし一方で、第一子が入園前の母親は、母親の仲間集団の難しさも感じている。このことからも、母親になって間もない者がスムーズに仲間関係を築けるような配慮が必要と考えられる。さらに、育児不安の高い母親においては、仲間関係に難しさを感じやすいという結果が導き出された。この点にも配慮して、育児不安を感じている母親が居心地がよいと感じられるような育児グループを形成する必要があると考えられる。第二に育児グループで提供されるべき情報であるが、本研究の結果から、第一子が入園前の母親は、育児に関する情報の重要性を認識していることが導き出された。この結果は、育児経験の少ない母親に対して、育児に関する情報を提供することの重要性を示すものである。一方で、不安感の低い母親は、育児以外の情報を得ていることが示された。この結果から、母親のメンタルヘルスを考えた場合、育児グループで育児以外の情報を提供することの有効性が考察される。育児グループにおいて育児以外の情報の提供もまた、積極的に考慮される必要があると考えられる。第三に、公園に行く頻度の高い母親、不安感の高い母親は、多忙感を抱いている結果が示された。育児グループを企図する際にも、母親が無理なく参加できるような頻度、時間設定が必要であり、それは、母親の不安感によって異なることを考慮する必要がある。

託児場面として取り上げた子どもを他人に預ける場面の機能について、明らかになった点は以下の通りである。すなわち、①子どもを他人に預ける頻度の低い母親は、

頻度の高い母親と比較して、預ける人に対する気遣いや心苦しさ、子どもと離れている間の不安感、子どもと離れる際に後ろめたさや離れることへの不安を感じている、②幼稚園・保育園以上のきょうだいをもたない母親は、年長のきょうだいをもつ母親と比較して、預ける人への気遣い、子どもと離れる際の不安感、子どもに会いたくなる気持ちが高い、③「育児困難感」の高い母親は、「育児困難感」の低い母親と比較して、預ける人への気遣い、子どもへの申し訳なさ、子どもと離れる際の不安感が高い、の三点である。

これらの結果から、公的な託児が企図される際に考慮されなくてはならない点は次のように考えられる。第一に、子どもを預ける頻度の低い母親、第一子が入園前の母親、育児困難感の高い母親は、預ける人に対する気遣いが高い。この点に関しては、公的な託児においても第一に考慮される必要がある。母親が子どもを預ける際に、託児相手に対して気遣いをする必要のない託児事業が考慮されるべきであり、公的な託児のもつ長所の一つとなるようにならなくてはならない。第二に、子どもを預ける頻度の低い母親、第一子が入園前の母親、育児困難感の高い母親は、託児の際、別れ際の不安感が高いことが示されている。これは母親が子どもと離れる経験に影響される部分が大きい。公的な託児事業においても、託児機会の少ない母親がこのような心理的状態におかれることを考慮する必要がある。また、託児場面におけるスムーズな母子分離は、以降の託児にも母子ともに好影響を与えると考えられる。それゆえ、託児機会の少ない母親に対する、子どもとの分離の際へのフォローは非常に重要な課題と考えられる。第三に、育児困難感の高い母親は、子どもと離れている間の不安感が高いことが示されている。この結果は、育児に困難を抱える母親が、一方で、子どもと離れた際には不安を感じているという二重拘束の関係にあることを示している。これは、公的な託児が企図される際に特に重要な課題となる。託児の目的の一つには、母親の育児の様々な負担を軽減することが挙げられる。その一方で、本研究の結果は、託児により母親の心理的負担が増加する可能性があることが示された。託児に伴う母親の心理的変化は今後の研究課題の一つであり、今回の調査結果は、特に育児困難感の高い母親に対しては、ただ子どもを預ける機会を増やすだけでなく、母親の心理的ケアを併せて提供する機会が必要なことを示すと考えられる。

謝辞

本研究にご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。併せて、お子様の健やかなご成長を心よりお祈り申し上げます。

〈引用・参考文献〉

亀山美津子　一九九八　育児支援ネットワーク　家庭教育研究所紀要、20, 87-91.

加藤道代・津田千鶴　一九九八　宮城県大和町における〇歳児を持つ母親の育児ストレスに関わる要因の検討　小児保健研究、57, 433-440.

川井尚・庄司順一・千賀悠子・加藤博仁・中野恵美子・恒次欽也　一九九三　育児不安に関する基礎的検討　日本総合愛育研究所紀要、30, 27-39.

経済庁国民生活局　一九九七　平成九年度国民生活選好度調査

厚生省　一九九九　平成十年版厚生白書

佐藤真子　一九九六　乳幼児の精神衛生と家族への援助　佐藤真子(編)　人間関係の発達心理学2　乳幼児期の人間関係　培風館　Pp.177-205.

佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則　一九九四　育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連　心理学研究、64, 409-416.

菅原ますみ　一九九九　子育てをめぐる母親の心理　東洋・柏木恵子(編)　社会と家族の心理学　ミネルヴァ書房　Pp.47-79.

諏訪きぬ・戸田有一・堀内かおる　一九九八　母親の育児ストレスと保育サポート　川島書店

田中昭夫・尾添真希子　一九九六　幼児を保育する母親の育児不安を軽減する要因の検討　家庭教育研究所紀要、18, 61-68.